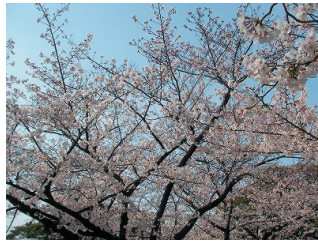




告 報 関西大学大学院外国語教育学会 二〇〇八年度 研究大会

2009年3月14日、関西大学千里山キャンパスにて、2008年度研究大会が開催された。当日は、ワークシヨップ1件、研究発表4件の発表があった。また、杉谷先生による基調講演に引き続き、本大会ではじめての試みとして、「コミュニケーション能力の複合性」をテーマに、本学会ならではの多言語の先生方によるパネルディスカッションが行われた。



ワークシヨップ

文法訳読式授業からの脱出
— 四技能向上のためのマルチメディア教材作成と授業活用 —

講師 深田将揮

(関西中央高等学校)

ワークシヨップが始まり、まず驚いたのが深田さんの声の大きさ。教師のやるぞという気迫が伝わってきました。

ユーモアを交えたトークで、教育現場の現状やこれまでの取り組みを紹介していただきうちに話に引き込まれていきました。
何より、生徒に「できた」という喜びを実感させることに重きを置いている姿勢が印象的。そのために、マルチメディア教材を活用したり、CDや英検などの外部評価を取り入れたりと意欲的に取り組んでおられます。また、マルチメディアを取り入れる一方で、授業では先生や友達がいるからこそ出来る活動を意識的に行われているとのこと。

そこで、今回のワークシヨップもペアワークを中心に進められることとなりました。この学会ならではの醍醐味で、私はなんと齋藤先生とペアワークをするという幸運に恵まれました。背中合わせで音読をしたりと、どきどきしながらも楽しく模擬授業を体験することができました。
活動の内容や方法は、これは齋藤先生に教えていただきたいもの、これは竹内先生に教えていただきたいもの、など随所に大学院で学んだことを取り入れ実践されており、さらに独自の活動も加えられてい

ました。「生徒に教えてもらっただ」と誰からも謙虚に学び、その上で良いものはどんどん取り入れ、状況に合わせて改善していく姿勢を見、素敵な先生だと感じました。実際に教えた子たちの英語力が伸びているというのにも頷けます。
そんな深田さんが最後に伝えてくれたのは、生徒の英語力を伸ばすのは「教師の熱意」だということ。私の隣にいた齋藤先生も最後につぶやいていた「彼の熱意はいいね」と。きっと生徒にも届いているだろうと思います。



(中山 由美子)

研究発表 I

自律学習におけるビデオ会議システムの有効性

中西 礼

(関西大学大学院)

海外における日本語教育の問題点として、教室で日本語を使う機会がほとんど無い、履修後に学習継続の手段が無いので身に付けた日本語を忘れてしまう等が挙げられま

す。
本研究で中西さんは、学習者の自律的学習姿勢を養うことの必要性に注目し、その手段としてビデオ会議システムを学習に利用することを提案し、3ヶ月間にわたる調査活動の後、各種テストやアンケートにより学習意識や学習効果の検証を行いました。
調査参加者の背景や調査スケジュール、調査結果に見られた語彙量の変化を示す明確な表や説明とも合わせて、発表者の調査・発表能力の優秀さを示す見事な発表でした。質疑応答では10人が次々と出す様々な質問にも的確に答えており、発表者の姿勢に感心すると同時に、本研究に対する参加者の関心の高さと期待感を実感しました。

(足立 圭介)



研究発表 II

「慰め」行為における日独対照研究

— 心理的距離が発話に及ぼす影響 —

濱 由依

(関西大学大学院)

日本人およびドイツ人大学生の友人関係における「慰め」行為の特徴を明らかにすることをテーマに、濱さんはその研究成果を発表されました。丁寧な先行研究の蓄積の上に、ご自身の新しい研究が位置づけられており、発表は大変興味深いものでした。
本研究では、日本人大学生100名、ドイツ人大学生100人を対象に、「□」形式の質問紙調査が行われました。質問紙では、8場面16種類(親友・知人)が設定され、場面ごとの被験者の感じる深刻度が調査されました。質問紙調査によって得られたデータを分類した結果、8つのカテゴリーが抽出され、それぞれに考察が加えられました。特に、日本人とドイツ人大学生では、「質問する」という「慰め」行為の自身が大きく異なる、という指摘は、大変興味深いものでした。
本研究のまとめでは、日本人とドイツ人大学生が「慰め」行為で選択するストラテジーは、心理的距離、性別の影響を受けることが報告されています。また、高い割合で使用される「慰め」行為のストラテジーには、日本人とドイツ人大学生に差はないものの、「慰め」行為の表現の仕方において、言語固有の特性が顕著に見られることが報告されています。

最後に、「調査地域の偏り」、「質問紙の信頼性と妥当性」、および「ドイツ語教育への応用可能性」が、今後の課題と展望として報告されました。「慰め」行為に注目することによって、「異文化」を具体的に浮かび上がらせる研究方法と、その結果をさらにドイツ言語教育へ応用しようとする濱さんの姿勢は、参加者からも多くの支持を集めていました。

(住 政二郎)



研究発表 III

中国人日本語学習者の依頼表現に関する研究

尹 郁子

(関西大学大学院)

中国人日本語学習者の依頼表現に注目した尹さんは、日本語母語話者との比較を通じてその共通点と相違点を明らかにし、相違点に関してはその要因を探ることを研究の目

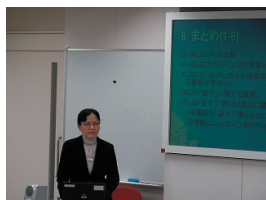
的としました。

データの収集方法はアンケート調査による談話完成テストで、その被験者は中国語母語話者(CO)、外国語としての日本語学習者(FL)、第2言語としての日本語学習者(CSL)の4グループ。アンケートの内容は、親しい先生や友人に「お金」または「ペン」を借りるという場面で、どのようなストラテジーがどの程度用いられるのかを調査したものです。

結果として、「だけが「借りる」表現を複数のストラテジーを用いず初めの段階で使用するのに対し、残る3グループの場合は、まず相手が「お金」または「ペン」を貸すことのできる状態にあるのかを確認してから依頼に入るといふ、2段階のストラテジーを取ることが明らかにりました。

COの会話ストラテジーに疎遠な自分にとって興味深かったのは、返済/返却の意図を表す際「は」「絶対」「必ず」など様態の副詞を用いるのに対し、CSLは明確な日時を指定するという、どことなく「欧米的」な言語行動をとるといふ点でした。また、日本語での依頼行動は、通常は話者の地位に関係なく「謝罪」ストラテジー(例「すいませんが...」)を用いるアコモデーション型であることとめていました。

(藤川 穂輔)



研究発表Ⅳ

高校生を対象とするドイツ語初級学習者のための教材作成

藤川 穂輔

(関西大学大学院)

藤川さんは前期課程在学中の3年間、ドイツ語教材の作成に取り組んでこられました。発表は、高等学校における英語以外の外国語教育の位置づけが概観された後、一、教材作成のスタンスとプロセス、二、実際に教材を使って授業を受けた生徒の感想、そして三、今後の課題、という流れで展開されました。

教材作成のスタンスに「機能・概念による言語分類」「ラジデス・ラジデ」の3つが取り入れられ、一般によく見られる文法項目によってレッスンが構成されているものとは一味違うものになっていました。アンケートによって高校生が興味・関

心のあるテーマを調査し、その結果から各レッスンの場面を設定し、また英語とドイツ語の類似性に着目して英語による解説を多用するなど、学習者を考慮した様々な工夫がなされていきました。

実際に教材を使った生徒の感想には、「英語を使ったほうが分かりやすかった」「文化や歴史について知らない」と、「道具」としての言語さえ使えないと感じた」というものがあり、藤川さんが意識的に教材に組み込まれたものが、生徒に効果的に伝わっていたことが伺えました。

今後の課題としては、自己学習促進のためのポर्टフォリオ作成と、複言語的アプローチによる学習の動機づけが挙げられていました。文法のような言語学的観点から言える英語以外の外国語教育の位置づけが概観された後、一、教材作成のスタンスとプロセス、二、実際に教材を使って授業を受けた生徒の感想、そして三、今後の課題、という流れで展開されました。

(杉 真吾)



基調講演

CERFにおける「ミニエーション能力」の考え方と「欧州言語ポर्टフォリオ」

杉谷 眞佐子

(関西大学)

杉谷先生は統合が進むヨーロッパの外国語教育、特にCERF(ヨーロッパ言語共通参照枠)について講演くださいました。昨年、日本でも英語教育に紹介され、少しずつ導入され始めたCERFですが、Can-Do-Statementの部分に焦点があたり、その作成された理念や経緯についてはあまり考慮されていない傾向が感じられます。今回、杉谷先生は、作成における理念や経緯を、わかりやすく説明してください、さらにCERFの特徴についてお話をくださいました。

まず、理念については、2度もあった悲惨な世界大戦を省み、欧州の平和と発展のために、多様な言語や文化の共存を目指し、相互の言語と文化の尊重が必要であること、また国境を越えて移動する能力の育成が課題となっていることをあげ、CERF加盟国はその態度や能力の育成に力注いでいること等をお話下さいました。CERFが誕生する背景には、Threshold Level 英

語(1975)、Niveau Seuil フランス語(1976)、Kontaktschwelle ドイツ語(1980)のように多くの言語で共通に作成された「しきい」シリーズがあります。これは言語材料を「伝達機能」「一般概念」「特定概念」に分けてリスト化し、学習目標に応じてモジュールを作成して教授する「行動中心」外国語教育の方法で、ヨーロッパのコミュニケーション・アプローチの基盤となった方法です。言語知識の学習から言語行動力の育成に重点がおかれ、教材も「状況↓発話意図↓伝達表現」と別語彙(↓スバイラル式の形態学習)の流れになっていきます。評価の特徴として「能力記述文」の尺度化についてもお話下さいました。

「講演の最後に、能力記述文の問題点とCERFの受容、CERFを開発した欧州評議会(母語+2外国語による)コミュニケーション能力」がなぞ求められるのかを「グローバル化時代の市民性の育成」の観点から説明されました。大変興味深く、外国語教育に関して従来とは異なった視点から考えてみることを促すような内容でした。(今堀 志津)



パネルディスカッション

コミュニケーション能力の複合性

菊地 歌子

(関西大学)

パネルディスカッションは、4人のパネリストが4ヶ国(仏・独・英・中)のCERF事情について10分ずつ発表をした後、フロアから質問や意見交換をするという流れで行なわれました。4言語の専門家が一堂に集まりパネルディスカッションを催すことは、外学会ならではの企画。非会員の参加者も数名おり、中には遠方から参加された方もいました。

フランスにおけるOMCと外国語教育 菊地 歌子 (関西大学) 菊地歌子先生には、フランスの学校教育における外国語学習のカリキュラムについてご紹介いただきました。フランスでは2008年から、6歳から10歳の児童が

通う ecole élémentaire (日本の小学校にあたる)のCO(小学1年)から外国語学習が可能になりました。8言語(ドイツ語、英語、アラビア語、イタリア語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、ロシア語)から選択し、学習時間は週1・5時間、到達目標はA1。但し、履修希望者が10名以上であれば開講されるという条件つきです。

日本の中学校にあたるCollègeでは、5e(中学2年)から第2外国語の学習が必修となります。選択できる言語は先の8言語に、日本語、オランダ語、ベトナム語を加える11言語で、学習時間は週3時間。さらに、希望者は第3外国語の学習も可能です。学習到達目標は、ecole élémentaireで学習した外国語と同じ言語を学ぶかどうかによって、A1もしくはA2となります。

日本の高校にあたるLycéeでは、現代へブライ語、デンマーク語、現代ギリシア語、トルコ語等に加え、選択できる外国語は15言語にも広がります。学習時間は週2〜3時間で、第1外国語および第2外国語の到達目標はB1からB2、第3外国語についてはA2からB1。また、希望者には留学制度や無料の強化レッスンを利用することができます。

以上のカリキュラムと日本の学校教育カリキュラムを比較すると、学校で学習可能な外国語の多様さに驚かされます。また、中学2年時に第2外国語学習が必修になり、希望者は第3外国語まで学べるなど、外国語教育における学習時間の多さが何え、まさに複文化・複言語主義教育の実践であると言えます。



ドイツにおけるCEFRと「言語ポートフォリオ」

杉谷 眞佐子

(関西大学)

ヨーロッパでは母語+2外国語学習が当たり前となっています。ドイツの場合植民地が少ないために、英語やフランス語ほどドイツ語母語話者は多くありません。しかし、トルコなどから移民を多く受け入れた背景から、ドイツ語以外の言語学習を学校教育で行う必要性が出てきました。地域によって移民が多く集まる場所もあるので、ドイツの外国語学習は各州によって定

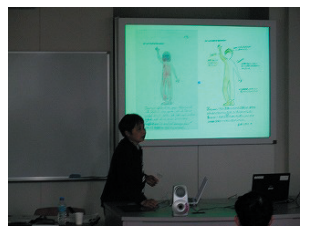
められています。

欧州評議会は、CEFRの6レベル・5言語活動に合わせた、「言語パスポート」「言語学習履歴」「記録・作品集」の3部から成る「欧州言語ポートフォリオ(European Language Portfolio)」以下[ELPと略す]を成人向けに開発しました。学校教育用にもELPは開発されており、学習集団によって重点領域も異なっており構成されています。

ドイツ語圏のELPでは、

言語運用力の評価機能と異文化対応能力や言語学習能力を育成する機能が重視されています。自己の学習方法に関する具体的な記録や省察、学習方法に関するクラスメイトとの経験交流、自分に合った学習方法の発見・工夫、言語・文化の多様性への気付きや、プロジェクトの記録等が「言語学習履歴」に残されます。この「言語学習履歴」を通じて、言語学習能力の育成に焦点が当てられるようになっていきます。

ヨーロッパでは、異言語間のコミュニケーション能力が重要なので、大変複雑なコミュニケーション能力を育成する必要があります。外国語を学習することで、母語以外の言語フィルターを通じて多様な見方を学べます。



英語「コミュニケーション能力育成における『異文化学習』の位置づけ

八島 智子

(関西大学)

英語が事実上世界の国際語となっている中、「コミュニケーションをする相手は誰なのか?」という問題が提起されました。世界で英語母語話者は約3億5千万人おり、これは中国語母語話者の次に多い数。しかし、英語を公用語として非英語母語話者は、中国語公用語話者の人数を抜いて世界で14億人います。英語そのものの学習が大変難しいことから、英語を通じて異文化理解教育を行うことが難しくなってきました。そこで英語学習において、学習モデルを誰にするかが大きな問題となってきました。

コミュニケーション能力をどのように捉えるかで、2つの教育的アプローチに分かれます。語用論的な指導と目標言語文化圏の政治・社会・生活

活の理解を目指す「目標言語文化特定のアプローチ」と、ステレオタイプ・エスノセンリズムへの気付きや批判的思考、認知的複雑性など養うことを目的とした「国際理解のアプローチ」。「目標言語文化特定のアプローチ」から「国際理解のアプローチ」へ進むのが理想的であるとのことでした。

英語は社会的プレッシャーが強く、英語だけで異文化理解教育をすることは不可能です。他の言語を通じて英文化に触れることも可能なので、学校教育で英語以外の言語を取り入れることも解決策の糸口となるでしょう。



日本における中国語教育とCEFR「学習のめやす」

をめぐって

山崎 直樹

(関西大学)

山崎直樹先生からは、2007年に財団法人国際文化フォーラムより発行された『高等学校の中国語と韓国朝

鮮語 学習のめやす(試行版)」についてご紹介いただきました。

この『学習のめやす』は、高校および大学教員が中心となって作成されたものです。作成の背景のひとつに、日本の高等学校教育では英語以外の外国語についての具体的な学習指導要領がなく、何単位で何を学び、どう評価するかは各学校によって異なるため、せっかくの高校での第2外国語学習が大学教育と連携されないという問題がありました。

『学習のめやす』の特徴は、近隣国の言語や文化を学ぶことの意味を提示した上で、コミュニケーション能力の向上を目標とした授業作りを目指し、16の話題分野(韓国朝鮮語では13)ごとに、「コミュニケーション指標」として4レベルを能力記述文で設定していること、また、各話題分野での学習項目を「言語領域」と「文化領域」に分けて明記していることです。

山崎先生は、CEFRが「国から国への移動」を念頭に置いたものであるなら、『学習のめやす』は「高校から大学への移動」の指標となるのではないかと、という見解を示されました。



フロアからは齋藤先生と日本語教育専攻者から意見が寄せられました。

齋藤先生からは、中学生がタイへの修学旅行で相互理解を深めた例を挙げ、異文化交流を進められれば戦争は回避されると強調され、また「コミュニケーションは何のためにするのか、英語教師は文化的背景を考えて教室で日々の指導に当たってもらいたい」とお話しくださいました。

日本語教育専攻者からは、異言語間でのように相互理解を深めていけるのかという疑問や、また外国語を学習するときに、単なる知識で終わらずに日本語でどのように異言語と関わっていきけるかを考えていきたい、という意見も交わされました。最後に杉谷先生から、「欧州では教員間の交流も多く、政治的な問題があっても、草の根交流が盛んであれば、トラブルは回避できるとの見方

があります。日本では英語を学習する機会が非常に多い反面、他言語を学校教育で取り入れているところが非常に少ないが、英語教師は生徒が英語以外のどんな言語を学習するかを視野に入れてほしい」と、外国語の教員は異文化理解の機会が多く、草の根レベルの交流が大切であることをお話くださいました。

(神道 美映子)
(船越 貴美)

【余録】

第3回研究会参加者は、合計46名でした。うち在学学生の学会員22名、修了生の学会員10名、教員7名、非会員の学生2名、非会員一般5名でした。多くのご参加、誠にありがとうございました。

「 変 わ り ま す 」

春の陽気に誘われて、ついつい出かけたくなる季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。日頃は本学会の活動に、御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本日は皆様に2点大切なお知らせがございます。まず、1点目は会則の変更についてです。既に皆様にはご連絡済みかと思いますが、昨年12月に行われた臨時総会にて会則の全面的な見直しが行われ、全て承認されました。次年度開始月：6月における新会則の発効開始に伴い、今年入学されました現役院生の皆様、既に会員である現役院生の皆様におかれましては、別途入会手続と会費納入(年額:1000円)が必要となります。つきましては、修了生の皆様は、同封の会則を、先生方、現役生の皆様は、レターケースに配布しました会則をご一読頂き、今後とも本学会活動への御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。主な変更点は以下の通りです。会則をご確認下さい。

- 会員資格の整理 (第2章第6条)
- 現役院生の会費納入額(1000円)の設定 (第2章第6条10)
- 入退会手続き事項の追加 (第2章第9条)
- 総会、臨時総会成立条件の追加 (第4章第22-23条)

※なお、今年4月に入学された院生の皆様、ならびに既に会員である現役院生の皆様には、改めてご入会手続きのご案内を致します。入会ご希望の際は、①6月20日(土)開催予定の研究会、総会にて、もしくは②本学会HP上でお手続きをお願い申し上げます。現在、その手続きに向けての準備を行っておりますので、詳細につきましては、近日中にMLならびにHPにてお知らせいたします。

2点目は、6月に開催予定の研究会、ならびに総会のご案内です。毎年恒例行事となりつつある研究会と総会を同日に開催する予定です。研究会では、今年も、現役院生の皆様に博士論文、修士論文執筆

の参考になる情報を提供するため、修了生の皆様に講師、相談役としてお招きし、執筆体験談ならびに個別相談会を中心に、パネルディスカッションを交えた研究会を企画しております。この貴重な機会をぜひお見逃し無いうよう、お1人でも多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

詳細は以下をご覧くださいませ。

- 日時：6月20日(土) 13:00より
- 場所：千里山キャンパス 尚文館501教室(予定)
- プログラム
 1. 開会行事
 2. 全体会【パネルディスカッション】(80分)
『(仮)外教修了後の実践』
※各専攻言語の修了生(若干名)からの発表後(60分)、ディスカッション(20分)
 3. 分科会(修士論文・課題研究、博士論文2つの会場に分かれて実施)
【第一部】講演「修士論文・課題研究について」
(20分×2)、「博士論文について」(40分)
【第二部】相談会
「個別又はグループ相談会」(70分)
 4. 閉会行事 ※引き続き2009年度総会

いよいよ6月より新会則が発効されますが、これまでと同様、会員相互の親睦を深めつつ、学術的向上とその発展を図ることを目的とし、本学会HP(<http://kufler-s.jp>)やMLを活用しながら活動のバージョンアップを目指していく次第でございます。そこで、皆様のご意見、ご要望を今後の参考とするため、本学会HPトップページにある「お問い合わせ」をどうぞお気軽にご利用下さい。夏頃には、2009年度の会費振込用紙を送付させて頂く予定ですので、お手元に届きました際には、お手続きの程どうぞ宜しく願い申し上げます。また、学会HPで本学会の最新情報や他学会の情報を随時アップしておりますので、どうぞご覧くださいませ。